

研究ノート

舞姫第二作説についての疑問

嘉部 嘉隆

森鷗外の『舞姫』が、鷗外の処女作ではなく第二作であるとする説が、最近では定説化しつつあるようである。たとえば本年（昭和55年）三月発行の景山直治氏の著「鷗外文学入門」（古川書房）には、「制作の順序は『うたかたの記』が先で『舞姫』『文づかひ』と続くので」とあり、また河合靖峯氏著「森鷗外」（センチュリーブックス、清水書院昭41・10）でも「実際の執筆の順序は『うたかたの記』『舞姫』『文づかひ』の順であった」と書かれており、このような啓蒙書でも、『舞姫』が第二作であると断定的に書かれるようになっていた。

この、『舞姫』第二作説を定説化したのは、多分、長谷川泉氏の『舞姫』（森鷗外論考）／＼昭37・11／明治書院であろう。長谷川氏は次のように書いている。

留學土産の三作のうち、「舞姫」が最初に執筆されたものではなく、「うたかたの記」が最初だと言い、あるいは「文づかひ」

をもって最初だとするのは、主として与謝野寛・森潤三郎および森於菟の説による。鷗外全集刊行会から出された「鷗外全集」第五卷（昭和二・八）の後記、与謝野寛の「編纂者の辞」によれば「うたかたの記」について「是れが先生の小説の処女作である。」とあり、また「舞姫」については「是れが先生の小説の第二次の作である。」と記されている。しかしながら、目下のところ、いずれが最初に執筆されたものであるかを断定的に断定するには資料が乏しい。とにかく「舞姫」が創作の文壇処女作ではあったが、最初に執筆されたものではないとする推論をもって満足しなければならぬ。

長谷川氏の説は、あくまで「推論」であって、断定ではないにも拘わらず、以後、「舞姫」第二作説は断定的に記述されることが多くなつてゆく。

『舞姫』第二作説に気づいていたのは、長谷川氏が最初ではない。平野謙については、長谷川氏も紹介しているが、他に岸田美子氏も、その著『森鷗外小論』に、

書かれた順序からいへば、「うたかたの記」は「舞姫」の先であつたといふ。（森潤三郎氏著「鷗外森林太郎」四二頁）

と記している。この「鷗外森林太郎」は、昭和17年丸井書店版で、その四二頁には、「うたかたの記」の方が前に書かれたと聞いている」と、根拠を明らかにせず伝聞の形式で書いている。この書物の元版である昭和9年昭和書房版に拠れば、その二四頁に、「掲載は前後するが、眞の処女作は『うたかたの記』で、『舞姫』は第二次

である。」とある。

さて、長谷川氏の『舞姫』第二作説の根拠となった「鷗外全集」の「編纂者の辭」であるが、これがどれくらい信頼できるものであるかを検討してみる必要があるのではなからうか。「編纂者の辭」に明らかな誤りが多ければ、『舞姫』第二作説も虚妄である可能性も出て来るというものである。そこで「編纂者の辭」を調査したところ、次のような、明らかな誤りが見出せた。誤りの部分を引用してみよう。

「舞姫に就きて氣取半之亟に与ふる書」は相澤謙吉と云ふ署名を以て當時の雑誌「しがらみ草紙」に書かれ、「再び氣取半之亟に与ふる書」は同じく相澤謙吉と云ふ署名を以て當時の「報知新聞」に出されたものである。後に「つき草」に収められた。私は「報知新聞」の切抜を賀古鶴所先生より拝借してゐるが、其れには氣取半之亟の「舞姫評」の切抜も併せて添へられてゐる。但し其れは「江湖新聞」に載せられたもので、「舞姫評」、「舞姫再評」、「舞姫三評」の三回に亘って出た事が分かる。氣取半之亟は巖谷小波氏の匿名と云ふ事である。

以上の引用だけでもいくつかの誤りが見られる。「再、氣取半之亟に与ふる書」は「報知新聞」ではなく、「國民新聞」に出たものであり、氣取半之亟の『舞姫』評（『舞姫評』ではない）は、「江湖新聞」に出たのではなく、「國民之友」に出たのである。「江湖新聞」に掲載されたのは「舞姫再評」以後であり、かつ「舞姫四評」まで掲載されている。また、氣取半之亟は巖谷小波でなく、石橋忍月で

ある。このことは、伝聞でなくとも、例えば「再、氣取半之亟に与ふる書」の中に、

足下は堂々たる批評家らしき言を出して其識言、殆ど明治の忍月を圧するものゝ如く

とあるので、ちよつと注意すればわかる筈であらう。そればかりでなく、「氣取半之亟に与ふる書」（ちなみに、「しがらみ草紙」に掲載されているのは「舞姫に就きて氣取半之亟に与ふる書」という題名にはなっていない）において、

足下は何人ぞや白ちりめんの頸巻、ちりめんの羽織、相撲取に似たる下駄を穿き三百代言といはれ番内様と呼ばれて自ら覺らず書を痴女に寄せて卻けられ債を負ひて商賈の群より逐はれたりといへり（露子姫）を見よ

という書き方がなされており、さらに忍月の小説に登場する人物がずらりと引き合いに出されているのであるから、ちよつと知識があれば、間違ひはしない石橋忍月を、巖谷小波と誤まつているようでは、この「編纂者の辭」の信頼度の低さが推測できるであらう。誤まつているのは以上の部分だけではない。たとえば、

「有樂門」は明治四十三年の雑誌「心の花」に出た。

と書いているが、正しくは明治四十年一月の「心の花」である。さらに、「カズイスチカ」を『涓滴』に入っているのかのように書いているが、『分身』に収められているのが正しいというように、いささか誤りが多すぎるのである。もっとも、与謝野寛は、この「編纂者の辭」の最初の部分で、

掲載されている。また、氣取半之丞は巖谷小波でなく、石橋忍月で

者の辭」の最初の部分で、

此の「編纂者の辭」を書く資料を小嶋先生と船越政一郎先生とから御親切に教へて頂いたので、其等の資料を一括して置いたのであるが、此の一月に、いつも大切にしまつて置く所から机邊に出した記憶があるのに、一週日の中に何かの書き物の中へ紛れ込んだらしく、驚いて繰返し大掃除をして書齋の中を探しても、まだ今日まで見出さない。(中略) 右の理由で、茲に書く事が簡単になった。また多少の思ひ違ひの混じて居ないかを恐れる。

と書いているので、「有樂門」や「カズイスチカ」については思い違いと解釈できるであろう。しかし、資料がまぎれこんだために誤りが多いという「編纂者の辭」の中で、『舞姫』が「第二次の作である」という記述だけを正しいと断定はできかねるのである。与謝野寛は『うたかたの記』について、

明治廿三年の雑誌「しがらみ草紙」に出て、後、明治廿五年七月刊行の「水沫集」に収められた。是れが先生の小説の處女作である。私は此年の八月に初めて東京に出たが、九月の初めに、落合直文先生の駒込淺嘉町の家の内玄關の横に有つた書棚で、鷗外先生から贈られた瀟洒な水色の表紙の、しかも厚く重い新本を見付けて、幾日も續けて讀んだ事を記憶してゐる。

と書いている。『うたかたの記』は「美奈和集」冒頭に置かれていたこと、「うたかた」と「水沫」の連想などから、与謝野寛が「うたかたの記」を處女作と思ひ込んだという考え方も可能ではなからうか。

森潤三郎の「鷗外森林太郎」(昭和書房版)は、「舞姫」は第二次である」と書いているように「第二次」ということばの共通性、また、「巖谷小波氏が氣取半之丞の匿名を以て書いた評に對し」と石橋忍月を巖谷小波と誤まっていることなどから、与謝野寛の「編纂者の辭」の記述を引継いでいることが明らかである。

以上のように見て来ると、『舞姫』第二作説は、きわめて根拠に信頼の置けない考え方であり、やはり『舞姫』は鷗外の處女作と考える方が穩当な判断ではないかと思われて来るのである。

鷗外に関する親族の回想の類については、かつて成瀬正勝氏が、「閑却してはならぬことは、その信憑性に関するきびしい吟味である。(中略) 鷗外におけるこれらの証言には、従来ほとんどその種の吟味が行はれてゐない憾みがある。」(『舞姫論異説』『国語と国文学』昭47・4)と書いているが、単に回想の類だけではなく、昭和三十年頃までの鷗外に関する研究等は、もう一度嚴密に吟味してみる必要があるのではなからうか。筆者は「諸家の鷗外論に對するいささかの疑念」として試み始めている。

△本学教授▽

〔追記〕旧字体の漢字が新字体で植字されている場合がある。
時間的余裕がないので、そのまま放置した。